母と娘の葛藤
—蘇雪林『棘心』を中心に—
The Ambivalence in Mother-daughter Relationship: Analyzing Xuelin Su's "Jixin"

龔　月婷
GONG, Yueting

摘要

"Jixin" was written by Xuelin Su, a famous female writer in the period of May 4th movement, known as Su's representative work as well. This novel told the story of Xingqiu Du, who was a female May 4th student left hometown to Beijing, and then went to France to continue her study. After suffering various setbacks such as illness during the time in France, finally in order to fulfill seriously ill mother's wish, she dropped out of school and returned homeland, and then got married with her fiancé who had never meet before. The novel explored the attitudes and lifestyles of Chinese intellectual women at that time, describing mental struggles for living on a foreign land in the age of turbulence, viewing opposition between the new women and the old women, telling the ambivalence in mother-daughter relationship. For example, the daughter was eager for leaving family to be free, however, cannot stop loving and missing the mother once stepped out, which clearly showed two-way depression of mother and daughter.

Mother-daughter relationship is a very important part of this novel. In this thesis, I apply Freud's psychoanalytic theory to examine mother-daughter relationship in the novel from a gender studies perspective. As a women-oriented family story which illustrated the ambivalent relationship between mother and daughter, I focus on the integration between mother and daughter, the Electra complex and the position of the male characters. Based on above analysis, I hope to explain Su's mother-daughter relationship from a new perspective and sum up Su's solutions to deal with mother-daughter problems in traditional heterosexism writing.

キーワード：*母娘関係　蘇雪林　『棘心』　家族物語*

Keywords: Mother-daughter relationship　Xuelin Su　*Jixin*　Family romance

1.　はじめに

蘇雪林（1897−1999）は五四時期[(1)]の代表的な女性作家である。筆名「緑漪女士」で散文集『緑天』(1928)、自伝的小説『棘心』[(2)]（1929）を発表し、当時謝冰心、凌叔華、馮沅君、丁玲と共に「最も成就ある五大女作家」[(3)]と称されていた。しかし、複雑な中国近現代史を背景

とする政治的原因により、彼女は 90 年代に至るまで中国大陸の文学史家たちから意図的に無視されてきた。蘇雪林は中国の伝統文化、例えば儒家の道徳思想を高く評価していたために、龍応台（「女性自我与文化衝突――比較両本女性自伝小説」、1995 年）と孟丹青（「従『棘心』看蘇雪林的道徳立場」、1999 年）に作風が保守的だと評されていたが、彼女の文学は周縁的位置から女性の新しい側面を提示しており、多様な着眼点から再評価する価値があると考えている。

五四運動の幕開けに伴い、女性の自立や男女交際の平等と自由が提唱されるようになり、伝統的な恋愛観・結婚観も覆されるようになった。しかし、旧い女性の生き方や考え方及び旧式結婚そのものを否定し家庭の束縛から脱出しようとしても、母親への未練のため、もしくは母親に孝を尽すために、最終的に家に戻り自由を放棄するか、死を選ぶ若者、特に女性も多かった[(4)]。このような母娘間の葛藤は蘇雪林の作品における重要な特徴の一つであり、それが最も色濃く表れているのが『棘心』である。

『棘心』は蘇雪林の代表作であり、中国近現代文学史上初めて女性作家によって書かれた自伝的長編小説である[(5)]。題名は『詩経』を出典とする言葉で、母親に対する子どもの懺悔を表している[(6)]。あらすじを紹介しておく。封建的家庭に生まれた杜醒秋は幼い頃から学問に熱心に取り組み、家族の反対にも関わらず、北京の高等学校に入学し、後に母親への愛着を抱きながらもフランスに留学した。しかし、フランスでの生活の中で醒秋は様々な挫折を味わった。秦風という男性の求愛によって、彼女の恋心が芽生えたが、家庭が決めた婚約を負っている彼女は母親を悲しませたくないがために彼を拒んだ。また、醒秋は性が合わない婚約者・叔健に失望し、婚約に反抗したが叶わなかったために苦しみ、精神的救済を求めるためにカトリックに入信した。最終的に彼女は重病の母親の熱望に応えるため、学業を放棄し、帰国して叔健と結婚した。劉乃慈は、「『棘心』はヒロインの心を苦しめ続ける彷徨いと葛藤を保留せず、赤裸々に表現し、（中略）近代中国知識人の精神様態の一側面を素直に読者に展示した。このような描き方は新文化に対する一方的な称揚か拒絶の態度より吟味に値し、（中略）五四時期の中国の近代性の考察に、多元的で独特な視野を提供している」[(7)] と評している。

『棘心』には、母娘間の葛藤、例えば母親に対する愛着心や母親から独立したいという願望等が赤裸々に描写されており、五四時期に登場した新女性[(8)] と旧女性との対立、及び世代間の抑圧を考察するために格好の研究対象だと考えられる。よって、本稿は『棘心』で描かれた母娘関係を探究することを目指す。

『棘心』における母娘関係を視野に入れて考察している先行研究には、以下のようなものがある。まず、李玲は結末部分の醒秋の墓参りについて、「墓参りは母娘間の形式上の清算であり、最後の懺悔と自責の念を通して母親と過去に別れを告げ、重荷を下ろしてからの彼女は自由に自分の人生を追求する」[(9)] と指摘している。李の「母親との訣別」という指摘には賛同するが、母娘関係の論述がやや表面的であり、かつ道徳的な面に偏っていると考えられるため、深く検討する余地が残されている。また、郭暁霞と蘇瓊は作中における母親と祖母、この二人の女性

像を二つの対極的なイメージに分けている。蘇瓊は、自己犠牲的で聖母の様な母親に対し、母親を抑圧している姑（祖母）は魔女的なイメージであり、娘は母親に深い愛情と同情を抱きながら、祖母を悲劇の源だと見なしていると解釈している[10]。一方、郭は、ヒロインの醒秋は家父長制文化の代表である祖母を極力批判していると同時に、母親の家父長制の維持者としての一面を意識的に視野の外に置いたのだと指摘し、母親を強く求める醒秋は「前エディプス期」に留まっている娘だと述べている[11]。

だが、小説では醒秋の母親は終始聖母というイメージで登場しているわけではなく、聖母とは正反対のイメージも含まれている。また、以上の先行研究は娘が母親にもたらした影響については述べられていない。作中では、母親は娘を愛しながらも娘を抑圧していた存在として描かれているが、一方で娘に抑圧されていたと考えられる姿も描かれている。このことから、本作における母娘関係のあり方に対する一つの仮説として、母娘間の相互抑圧及び「母親殺し」の深層心理が働いていると考える。本稿は主に精神分析の方法を用いて考察を試みたい。

この点に関して、本論が基づく理論についてまとめておく。

マリアンヌ・ハーシュによると、フロイトがエディプス物語を典型として提起した「ファミリー・ロマンス（家族物語）」[12]という概念は、その定義づけが男性中心的であり、女性の存在、特に母親の存在が主体的になれずに疎外されている。このような男性中心的な家族物語への反論として、大勢の女性作家は女たちを中心とした神話を母娘関係の視点から書き直しており、異性間の恋愛・結婚という因習的な物語の筋書きの中で断絶されてきた母と娘の絆の回復と母娘の葛藤の解決を求めながら、因習的な筋書きに母親を位置付け直す方法を模索し続けている。但し、大部分の作品は娘の語りを中心としたものであるため、母親の存在を重視する上で母娘関係への見直しは不可欠だと、ハーシュは主張する[13]。

フランスで宗教神話学を学び、神話学の研究者でもあった蘇雪林は、ギリシア神話を愛読し西洋の神話に魅了された作家であるため、『棘心』に神話的要素が見いだせるのも驚くには当たらない。結論の一部を先に述べれば、『棘心』で描かれている母娘関係にはデメテル物語との共通点がうかがわれ、また家庭を出て海外に赴く醒秋の成長物語の筋書きは、家庭の束縛から逃れ、自己の独自性を探求する子供というフロイト流の家族物語のパターンと合致している。次節で述べる杜醒秋の家族構成からも古典的な神話典型、例えばアンティゴネ物語の枠組みとの重なりを見出せる。よって、『棘心』をハーシュが述べる女性の家族物語として考察することは妥当だと考える。また、テクストの根底に潜んでいる「テクストの自己逸脱」[14]としての「母親殺し」も見逃してはいけない要素である。

つまり、『棘心』は母娘の結びつき、及び娘の恋愛・結婚、精神的自立と母との対立を描いた女性の家族物語と見なすことができる。では、因習的な異性愛物語の構造を採っている本小説の中で、娘を愛していながらも娘の自立を妨げる母親の存在に対し、娘の「母親殺し」の心理は母娘間の葛藤を解消するためにいかに機能しているのだろうか。さらに、テクストの深層に

潜在している「母親殺し」はどのように書き手の意図的な秘匿操作から「自己逸脱」して読み手に伝わってくるのであろうか。本論では、以上の問題を精神分析の視点から検証していく。まず第 2 節で女性の家族物語である『棘心』の全体的構成、及び母娘関係と異性愛の間の軋みを論じ、次に第 3 節で母親像について論じる。第 4 節で母娘の同一化と娘の「母親殺し」の深層心理を論述し、最後にテクストにおけるこの両者の共同作用を明らかにする。

2. 女性の家族物語である『棘心』

家という範囲で杜醒秋を取り巻く登場人物は、主に母親と祖母と父親、及び亡くなった兄の面影に限られている。その中で、祖母と母親を醒秋の自立を妨げる同一範疇の人物と考えることができる。このことから、杜家は以下のような家族構成であると見なせる。すなわち、一家の主である父親、慈愛に満ち同時に抑圧的でもある母親、母親を愛しながらも家を出て自立したいと考える娘、娘の回想に現れる亡くなった兄の面影、そして家庭外の人物として登場する娘に恋する男性、といった構成である。先述のように、以上のような構成は古典的なギリシア神話典型、アンティゴネ物語やデメテル物語の枠組みとも共通し、『棘心』は女性の家族物語だと考えられる。

支配的であり母権の象徴である祖母との対比として、醒秋の母親は自己犠牲的な「聖母」である。祖母に対する醒秋の抵抗が激しくなるほど、彼女の母への同情、並びに愛着心がより深くなっていく様子が見られる。更に、その愛情の深さは母娘間の物理的距離の変化と共に深化していく。だが、本小説に見られる最も顕著な特徴は、娘の母親への愛着だけではなく、家父長制の下で抑圧され、自由になれないという母親の代表する旧い女性の宿命への抵抗、母親と分離したいという願望も含まれていること、すなわちアンビヴァレンスが見られることである。

ここで、母娘をめぐる家族物語とアンビヴァレンスとの関係について説明する[15]。ハーシュは、ド・ローレティスの「『女らしさ』に対する女たちの「同意」と異議申し立ての両面」[16]という弁を用いて、母娘をめぐる家族物語の概念を解釈している。つまり、娘は母親の世代の女性に代表される「女らしさ」を理解し受け入れようとすると同時に、それに対して異議を申し立て、そこから自己を切り離そうという抵抗の意志も生じる、ということである。家族物語に表れているアンビヴァレンスとは、母娘間の繋がりと分裂が同時に存在し、物語を展開させていることを意味している。

この点を踏まえて、フランスに到着した後の醒秋の心理に目を向けてみよう。

> 母親を騙してフランスに来たことを思うと、醒秋の心は常に不安に陥ってしまうものの、フランスでの新しい生活に心が非常に浮き立っていたため、暫くして彼女の母親への想いは冷めていき、彼女も自分の学業に専念するようになった。（第四章、75 頁）

醒秋は留学のことを母親に打ち明けずに渡仏してしまったために、彼女の心には母親に対するやましさも生じていたが、彼女が感じていたのは罪悪感ではなく寧ろ母親と旧い家庭から離れた解放感と愉快さであった。

しかしながら、時間が経つにつれて、醒秋の母親に対する未練と愛着もリヨンに到着した当初より遥かに深くなっていった。彼女は友人への手紙で、「このようなどうしようもないほど母親を想い続ける経験は私にとって本当に生まれて初めてなのです。昔の男女のいわゆる恋煩いに陥ってしまった心持ちも、これと同じぐらいでしょう」（第十四章、261 頁）と書いている。このような言葉はやや大げさに見えるかもしれないが、「恋煩いに陥ってしまった」恋人のように熱く、真摯なる告白はまさに彼女の母親に対する深い愛情を表しており、また彼女が「前エディプス期」に留まっている娘であることを示す根拠だと考えられる。

一方、娘を深く愛している母親は娘の自立を妨げる存在である。そこで特筆すべきなのは、醒秋の留学に協力したのは父親だということである。彼女が入学試験に参加することを最初に報告した対象は優しい母親ではなく、父親であった。親密な関係とは言えない父親に留学の意思を告げた醒秋はそのことについて母親への手紙で一切言及していない。加えて、彼女はあえて「さりげない筆致」（第三章、60 頁）で父親に入試のことを打ち明け、自分にとってはただの試みの一つであり、それほどの熱意を持っていないことを強調した。それは家父長である男性に対する彼女の自己検閲という面もあったと考えられるが、加えて、彼女が内面化した家父長制を尊重する心理、無意識に家父長を中心とする心理から生じた自発的な行為であったのではないか。このように考えると、彼女は自我の意識が目覚めてもなお、父親との交渉の場では正面からの衝突を回避するような態度をとったとも言える。醒秋は母親を騙して留学の試験に参加したが、果たして留学を実行するか否かについてはまだ決心がついていなかった。しかし、合格したことを父親に報告すると、彼女は父親からの快諾を得ただけでなく、最初の一年間の費用も父親が提供してくれることとなり、それで彼女は留学を決心した。

以上のことから、醒秋の留学の決断と実行について最も重要でかつ決定的であった要因は、父親による許可と経済的支持の獲得であったことは明らかである。ここで明確にしておかねばならないのは、旧式家庭に生まれ、家族に良妻賢母[17]になることを期待されている醒秋の場合、留学は明らかに伝統的ジェンダー規範を逸脱する行為だということである。父親は醒秋に婚約者の叔健との結婚を強要していたので、彼女の自立の面から考えると最も超えねばならない存在であった。しかし醒秋の留学という逸脱行為に直接的な援助を提供したのも父親であった。つまり、父親は常に不在であるが、彼は娘にとって運命の鍵を握る人物であり、父親の言動は、娘の行動に大きな影響を与えるものであった。また、父親とは対照的に、母親は娘の留学を後押しする人物どころか、寧ろ娘にとっては避けたい対象であった。海外に行った醒秋にとって、父も母も不在であるにも関わらず、どちらも彼女の精神世界に強い影響力を持ち続け

ていた。

もう一つ注目に値するのは、留学は醒秋と母親の関係において初めての回復不能という恐れが含まれた別離であったということである。醒秋はフランスでの生活の中で、何度も母親との永遠の別れを予感していた。例えば、彼女は兄の訃報を受けた後、「多分永遠に、愛する母親と再会することができないだろう」（第五章、107 頁）という不吉な予感を抱き、自分が「どうしてフランスに来なければならなかったのだろう？」（同前）と自問し、昔北京で母親と別れる時の母親の涙と泣き声を思い出した醒秋は自分の留学を後悔し始めた。一方、父親の協力により、醒秋の留学が無事に実現し、第三章で彼女はフランスへ旅立ち、そこから物語の導入部が終わり、いよいよ娘と母の別離の本番の幕が開いたことも忘れてはならない。このような母と娘の別離と、物語の展開に鍵を提供した男性について、ハーシュは、「母と娘の物語は、父親/夫の介入を通じた場合にのみ、存在し始めるし、ここで父親/夫は、回復不能な別離を引き起こすのではなく、物語そのものの契機を提供する役割を負っている」[18] と述べている。但し、『棘心』における父親という存在は重要だとは言え、母の存在と母性愛の描写の方が依然として圧倒的である。その意味では、父親の位置を物語の進行のために適当に確保すると同時に、意識的に父親、或いは男性人物を、物語の中心から排除しているこの女性視点の家族物語は、『デメテル讃歌』と同じく、「娘の物語のみならず、母親の物語にも、声と正統性を与え」[19] る試みであったのではないか。

もう一つ葛藤する母娘関係に関する論点を挙げれば、醒秋の恋愛事情と母親/家庭との対立である。それは、ハーシュのいう女性の家族物語における「因襲的な恋愛の筋書き」[20] と「母娘の筋書き」[21] との葛藤に相当する。このことを説明するには、まず醒秋と男性人物との関係において、母親がどのような役割を負っていたのか、或いは醒秋と母親との関係が如何なる役割を負っていたのかに注目せねばならない。

2．1．母娘関係と異性愛との葛藤

本節は主に醒秋の兄と、フランスで醒秋に求愛する男性・秦風について検討する。両者は醒秋の理解者か、彼女の仲間のようなイメージとして登場しており、ヒロインを「理解してくれるかもしれない男」[22] という役割を担っている。

兄と醒秋との回憶、及び兄の死が醒秋にもたらした深刻な悲しみは兄妹愛を表している。家族物語の中で兄妹愛は往々にして母と娘の絆の妨げ或いはその絆を凌駕するものとして描かれてきたが[23]、『棘心』の中の兄妹愛は母と対立するものではなく、また母を超越するものでもなく、兄は醒秋と母への愛を共有できる存在として位置づけられている。従って、かえって母娘の結びつきを堅固にする存在として機能している。前述のように、醒秋に母親とはもう会えないかもしれないという予感をもたらしたのは留学先で受け取った兄の訃報であった。ここで兄の存在は、醒秋に母親との結びつきを想起させ、母娘の絆をより一層深める役割を果たして

いる。換言すると、作中の兄妹愛は母と娘の関係をより緊密にするものである。

一方、秦風は兄とは対照的に、ヒロインと母親との間の対立を引き起こした男性だと言える。彼は醒秋にロマンチックな告白をして、彼女の中の恋愛感情を喚起した。このような秦風の行為によって、彼女には叔健との婚約を取り消そうとする衝動さえも生じてきた。しかし、最終的に彼女のこうした衝動を抑えたのは母親への想いであった。

> それから母親の上には極めて独裁的な祖母がいて、祖母の威圧の下で、たとえ母親が母性愛により娘に自由を与えたとしても、祖母の朝から晩まで続く非難に耐えられる訳が無い。
>
> そうすると彼女は本当に母親をこのまま死まで追い詰めることになってしまう。（第四章、87 頁）

かくして、母親のために、醒秋は無理やり自分の感情を抑え、秦風の求愛をはっきり断ってしまった。彼女は友人への手紙の中でこのことを報告している。

> 恋の決闘において、彼［秦風］は勇者の冠を受けられます。
>
> このような大敵に遭った私が最終的に勝利を手に入れられたことはまさに有難いというしかないのです。
>
> これは私が生まれて以来の初めての勝ち戦なので、自慢に値します。（第四章、90 頁）

興味深いのは、醒秋は秦風の情熱的な恋愛を肯定しながらも、彼を拒絶した結果を自分の「勝ち戦」と呼んでいることである。この言葉から、秦風を拒絶したことにより母親との結びつきが保たれたという結果は、彼女にとっては望んだ通りの結果であることがわかる。秦風との恋愛が実ったら、つまり「理想的な自由恋愛」を達成したら、それにより母親との結びつきが崩壊する、もしくは妨げられる可能性があったのである。しかし、秦風を拒んだ後、醒秋はそのまま母親の元に戻るのではなく、母親を想いながら海外での生活を続けていく。このような母娘関係において、束縛と結びつきは明らかに見られる。醒秋にとって、母親は異性間の自由恋愛との対立、または障りとして現れており、常に醒秋を不安ややましさに陥らせていたにも関わらず、母親への想いは自己の主体性を束縛するものであると同時に諦められない結びつきの証でもあったのである。

上述のような娘の母への愛着、母との絆を保ちたい願望と、母と距離を置きたい願望の共存、並びにこの二つの願望の間で葛藤に陥る娘の姿について、ハーシュは、「女の発達の物語が、（中略）最初の母親への愛の中に浸り続けていることも不可能なのである。それは、情熱的な母親の官能性と、異性愛筋書きを形作る不安との間に、当初から生じている空間の中に、位置づけ

られるしかない」[24] と述べている。恋愛だけでなく、醒秋が進学することを決心し、伝統的ジェンダー規範から逸脱した時点から、彼女と母親との分裂の兆しが既に芽生えていたのである。醒秋は母親への強い愛着心と自己の意志の両方とも諦め切れず、母親への回帰願望と母親との分離願望の狭間で揺れ続けた。

3.『棘心』における母親像

杜醒秋の母親の造形には、以下三つの顕著な特徴が見られる。①姑/家父長制に抑圧されていた女性②自己犠牲的で、子供を深く愛している聖母的な女性③娘に深く影響を及ぼし、かつ娘を引き留めている存在、といった三点である。しかし、それらの裏には別の面が隠されている。よって、以上の三点を巡り、作中の母親像を見直し、深く考察していく。

3．1．姑/家父長制に抑圧されていた女性

前述したように、醒秋の祖母は長年嫁である母親に対し厳しいしつけを行い、召使いのように扱っていた。しかし、このような姑に母親は反抗するどころか、「姑に怒られたら、すぐにびくびくして、もし姑が怒り続けていると、彼女は土下座して、涙を流しながら、「私のせいです、お許し下さい」と詫び続ける」（第一章、20 頁）ことしかできなかったのである。このように強く抑圧されていた母親の姿を目にしていたため、娘の醒秋は祖母のことが憎くて堪らなかった。しかし、何故醒秋は、祖母の威圧に完全に臣服していた母親を軽蔑していなかったのだろうか。それは恐らく母親への愛着と同情が強まる一方、醒秋の抱く母親に対する軽蔑の気持ちは祖母への嫌悪に内包されるという形に転化したからだと考える。

実際、祖母が母親に行った抑圧は直接的なものであったのに対し、母親が娘に対して行っていた抑圧は間接的なものであった。しかし、娘も母親に対する抑圧者の一人だと考えられる。すなわち、この物語に呈されていたのはいわば母娘間の相互的抑圧である。娘による母親への抑圧が最も顕著に表現されているのが、母親の言葉が奪われていた場面である。例えば第一章において、北京で醒秋と別れる際、母親は終始悲しんでいたものの、沈黙したまま何も話さず、ただ涙を流し続けるばかりであった。

> 父親と叔父は何かを言って母親を慰めようとしたのだが、母親は別離のためだけではなく、他の何かの思いで泣いているようだ。（中略）まるで年老いた人がセンチメンタルな回想に溺れているようで、また胸の中に果てし無い悲哀が潜んでいて、何処にも訴えられないため、涙を流すしかできないかのようだ。
>
> 彼女は泣き続けて、ようやく泣き声を発した。これは明らかに何かの堪えられない痛みが彼女を攫み、何らかの深刻な悲哀が彼女の魂を苦しめているため、彼女が自分を抑えら

れなくて、叫び出してしまったのだ。（第一章、29 頁）

娘との別離を深く悲しんでいた母親であったが、テクストでの彼女は自己の語りを持っていなかった。ジェンダー規範を内面化した彼女に許されるのは泣くこと以外なかった。こうして話す主体を得られず、失語状態の母親の姿は父親が側にいる時だけではなく、娘が側にいる場合も同じように見られる。殆どの場合母親は娘に代弁される形式により登場しており、つまり家父長制以外に、娘の存在も母親を沈黙に陥らせているのであり、その意味で娘は母親の語りを抑圧している者とは言えないか。ハーシュは、「娘による母親のための語りは、母親のための弁明を口にすることでもあれば、母親を沈黙させ、社会的に無視することでもある」[25]と述べている。「娘による母親のための語り」とは、文学中の娘が母親に代わって、また母親のために、世界に向かって語ること、或いは母親に敬意を表し讃賞することを指す[26]。すなわち、娘が母を代弁することは母に語りを失わせることに等しい。『棘心』に表現されていた母娘関係及び母親の語りは、まさにハーシュの指摘の通りである。

他方、母親は旧い女性として、知識を得る機会を与えられず、リテラシーが欠如している。「知」の欠如は、母の語りの喪失または沈黙によって象徴的に示されている。母は己の語る能力、つまり知識を取り戻すためにある程度の努力もしていたが、こうした母を娘は無意識に抑圧していた。例えば、母親が字の読み方の説明を娘に頼んだが、それがあまりに頻繁であったために最終的に娘に拒絶された場面は、娘による母親の語りへの抑圧を象徴する表現だろう。

つまり、母親は「知」の獲得のための唯一の協力者である娘に拒絶されると、永遠に沈黙に陥っていくほかなかった。母親は自分で復習しようとしたが、彼女自身の力では到底足りなかった。従って、その後の彼女は言葉を徹底的に失い、全てが娘の言葉に包含される形で表されることとなった。すなわち、母親の姿と語りは、直接母親自身が表現したものではなく、娘を介して存在し始めるのである。例えば、醒秋は夢の中で重病の母親を以下のように描いている。

> 病でベッドを離れられないあなたは空気に向かって両腕を開き、「娘よ、帰ってきたわね。これからもう遠くに行かないでおくれ。二年間いなかったあなたに母さんはもう会いたくてたまらないのよ。あぁ、酷い娘よ…」
>
> あなたの意識が少し戻ってきた時、目が覚めたら、愛しい息子も娘も見られなく、（中略）その時になると、あなたの心の苦しみは私に想像できるものなのか…あぁ、可哀想な母親よ！ （第十四章、271-272 頁）

このように、母の台詞は娘の夢の中で出てきたものであり、母が主体的に発した言葉ではなく、娘の夢により作られたものであることがわかる。但し、醒秋にとって、「色々考え込んだりすること以外に、全ての想いは彼女の母親に繋がって」おり、「夢の中の人物というと、母親がいつも重要な主役だ」（第十四章、261 頁）。かくして母は娘の語りや夢において想像され述べ

られる客体となったが、娘との結びつきにより中心的な人物となっているとも言える。更に、娘に代弁される母と、母の言葉を自分の言葉に押し込んでしまう娘の関係は、母娘の同一化の表現だと見なすことができる。また、このような娘に代弁される形を利用していたからこそ、母は漸く父の存在を圧倒し、初めて家族物語における自分の位置を確保でき、折衷的なやり方とはいえ、娘とともに物語の中心的な位置を占めることが初めて可能になったのではないか。

3．2．聖母的な女性

ここで、上述した母親は一体どのような姿で物語に登場しているのかを考えたい。既に述べたように、母親は多くの場合、自己献身的な「聖母」の色彩が溢れているように見える。國吉知子によると、「『献身』とは、徹底した他者優先の善意、温情を意味するが、これは母性愛の非常に大きな特徴である」[27]。しかしながら、『棘心』の中の母親は終始聖母の形象により登場しているわけではない。確かに母親には娘を救済する聖母の様な形象があることは否定し難い。だが、少なくとも醒秋の夢の中では、彼女は神聖な聖母の様なイメージではなく、衰弱した瀕死の状態の形象で現れている。例えば、醒秋の夢の中では以下のように描かれている。

> どれくらいの時間が経ったのかも分からなく、ただ抱き合い続けている二人であったが、ふと母親の身体が後ろに倒れていく傾向を彼女は感じた。彼女は全力で母親に抱きついたが、母親の重い体が彼女の両腕から徐々に下に沈んでいき、その重量に堪えられず彼女の身体もともに倒れこんで行ってしまった。
>
> 「母さん、どうしたの？」と、彼女は母親の耳元で弱い声で叫んだ。
>
> 「私の心臓が病んでしまって、間も無く死ぬわ！」と、母親は呻吟した。母親の顔色は段々灰色になり、両目も暗くなり、すぐにも呼吸が絶えてしまいそうだ。彼女は驚いて夢が醒めてしまったが、耳元ではまだ母親の苦しい声が聞こえそうだった。（第十四章、262-263 頁）

これは明らかに醒秋の悪夢の描写である。夢の中の母親は自己を語ることができず、唯一できたことが呻吟と死を叫ぶことであった。このような彼女は聖なる聖母ではなく恐ろしい老女という表現の方が相応しいだろう。なお象徴的な意味からすると、母親の呻吟は語りが奪われ、沈黙に押し込まれてしまった母親の最後の声だと考えられる。また関連して、醒秋が住んでいる寮で一人の年老いたシスターが病死した際、彼女の死は醒秋の夢の情景に直接影響した。

> これからの彼女はまたよく夢を見るようになったのだ。夢の中では母親の灰色の顔がベッドに置かれた年老いたシスターの屍体の影と重なっていた。（中略）泣いて目覚めてから、じわじわと心持ちが悪くなってくるが、彼女には他人に教える勇気がない。これは心の底

では母親の死を呪っているようなことだから、彼女にはどうしても出来ないのだ。（第十四章、264-265 頁）

それだけではなく、しばらくして彼女に家からの手紙が届き、母親が病に倒れたことが書かれている。そのため、彼女の夢にはまた死んでしまった母親の姿が現れた。

彼女を最も苦しめているのは、母親を夢に見たことだ。彼女は時に血塗れの母親が倒れこんでしまったのを見て、時に両腕を胸の前で組んでベッドで横になっている母親を見ていた――胸元には十字架と花が飾られていなかったのだが。（第十四章、270-271 頁）

こうしてみれば、醒秋が夢の中で見た母親の死んでいる姿は、飾りの十字架や花もなく決して美しいとは言えず、まして輝く聖母というイメージとはかけ離れている。またこれはテクストの深層に潜む「母親殺し」の仄めかしとも考えられ、この点については第 4 節で述べる。

3．3．娘に影響を与え、引き留める女性

小説の中には、醒秋の母親への未練及び母親の元へと回帰したい願望に関する描写が多く見られる。例えば、母親への回帰は醒秋の夢にも色濃く表現されている。既に引用した醒秋が夢の中で母親と抱き合っている場面の少し前の部分では、以下のような描写が見られる。

彼女は夢の中で荒野を歩いている自分を見た。周りの景色は真っ暗で、悲惨だった。道には誰もいなくて、家畜も見られなかった。血のような夕日の下で、彼女は一人でゆっくりと進んでいる。夢の中で彼女は自分が世界の始まり以前にも、宇宙の終わり以後にも居ると意識して、心は惨めな気持ちに満ちていた。

しかし、彼女の心は自分にこの世界にはまだ一人の家族がいて、それは彼女の母親だから、探しに行かなくてはならないと言っているようだった。

彼女は長い時間歩き続けて、ふと自分が故郷にいるのだと気づいた。彼女は門にもたれて帰ってきた子どもを見つめている母親を見た。秋風が母親の白髪に吹き付けており、彼女は昔より衰弱したように見えた。（第十四章、262 頁）

以上の描写はまさしく醒秋の内面風景の反映だと言える。一見すると、娘は能動的に家に戻っていくようであるが、母親の存在がある種の引力となって娘を引き戻したとも言えるだろう。つまり、娘が本当に戻ったのは「家」ではなく「母親の元」であったのである。また、この場面での母親は依然として病弱であり、年老いた女性として描かれており、こうした姿が前述した献身的な母親のもう一つの側面であった。このような衰弱した母親像の方が、神聖で輝く聖

母という母親のイメージよりも、娘のやましさを喚起しやすいのではないか。

以上の 3．1．～3．3．の考察を通して、第 3 節の冒頭で挙げた①～③の裏の面が明らかになり、母親像の特徴をより正確にまとめることができる。つまり、①家父長制に抑圧されており、かつ娘との相互抑圧をしている母親②聖母的であると同時に、悲惨で恐ろしく、死を代表している女性③愛情だけでなく、自身の惨めさで娘を引き留める女性、といった三つの形象である。

4．母との同一化及びほのめかされた「母親殺し」

母親との対立を解消し、母親への愛着心と自己の志向の両立を最終目的とした娘が、母親と自己の間で揺れ続けることは不可避である。その過程の中で、醒秋が母親への愛着を強調しながらも、母親に対する呪いを含むような内面風景も存在しているというアンビヴァレンスが生じてきた。つまり、母が代表する旧い女性の宿命を拒絶しつつ、母との永遠なる別離を予感した彼女は深い苦痛を感じている。しまいには、悪夢に陥り、恐怖で彼女は狂いそうになる。

> 悪夢がますます頻繁に訪れるようになって、彼女を狂気へと追いやり、彼女は夜に目を閉じられなくなった。閉じたら恐ろしい幻像を見てしまうのだから。（第十四章、271 頁）

娘にとって、母親は狂気の象徴だけではなく、母親との分離も狂気をもたらす源であったと見なせる。但し、醒秋の場合には、母親が娘に狂気と幻をもたらしていると同時に、母娘の一体化も起きていた。例えば、故郷の母親の病を知った醒秋は、次第に体調が悪くなってきた。

> 醒秋は昔からもう愛する母親と会えなくなるとを予感して、今は尚更この兆しが必ず現実になってしまうと信じているため、彼女の希望は全部消えてしまい、何の力もなくなってしまった。昼間に彼女は布団の中で息もできないほど泣いていて、夜中に悪夢を見るのを怖がっているため、目を空けたまま天井を見つめている。全身の血液が潮のように脳に迫ってきて、やがて激しい頭痛になって、口の中も乾燥しすぎて、火が胸の中で燃えているようだった。（第十四章、272 頁）

遠く離れていたとしても、娘の病気は母親の病気とほぼ同時期に起こっていたというシンクロニシティーの表現から、母親の病気は娘の病気を引き起こす原因の一つと見なされる。更に、醒秋は母親の健康を祈るため、今までずっと距離を置いていた宗教にも頼るようになる。だが、後に醒秋の体調が快復したのは祈祷によるものではなく、母親が元気になったという朗報を受けた後のことであった。このように、母親の病気が娘の病気を引き起こし、また母親の快復が娘の快復に繋がるという明白な同一化の表現によって、醒秋と母親の結びつきが描かれている。

上述の娘と母親の健康状態の共時性から見れば、醒秋と母親との結びつきは明らかである。しかし、自我と母親の対立も顕著である。すなわち、醒秋は「自己を守るなら、母親を犠牲にせねばならない。母親を守るなら、自己を犠牲にするしかない」（第十六章、319 頁）という境地に陥ってしまったのである。このことから考えると、彼女の「母親殺し」の気持ちは、父や夫への忠誠心や母への嫉妬心などから生じたわけではなく、前述（2. 1.）の「異性愛筋書きを形作る不安」から逃れ、自己の志向と母への愛情を両立させるため、母娘の葛藤に対する新たな解決策として、母との同一化の願望とともに物語に作用しているのではないか。結末にある醒秋から叔健への手紙の中では、彼女の母親に対する懺悔が書かれている。

> 結婚の問題のため、私は何度も手紙を書き、家族とさんざん争っていたから、母を悲しませる言葉も沢山あったのは確かです。神様、何卒私をお許しください。あの頃の私はなぜあんな恐ろしいことを考えたのかしら、母に早く死んで欲しいと私は何度も願っていました。それは、私は母に背いて自由を手に入れたかったけれど、そのために母に重大な精神的打撃を与えることを恐れたからです。（第十九章、394 頁）

さらに、彼女は自分の「母に早く死んで欲しい」という気持ちに対して、それが「母を愛する心から生じたものなのだ」（同上）と弁明していた。彼女の告白には次のような内容が続く。

> 私が「自殺したい」と言ったのは、生を軽んじているからではありません。「信者になりたい」と言ったのも、イエス様を敬愛しているからではありません。ただ家族に意地を張っているだけで、わざとこのようなことを言って彼らを苦しめないと、自分の気が済まないからなのです。あの頃の私が自分の可哀想な母親に行った精神的な虐待は、今は全部痛ましい記憶と、深くやましい思いとなり、死ぬまで拭い去ることはできません！（第十九章、395 頁）

醒秋は母親を悲しませた行為を「精神的な虐待」と呼びやましく感じているが、自分の母親に対する悪意を否認しようとはしていない。それだけでなく、彼女は当時の気持ちを改めて検討した上、その「虐待」の源は母親に対する愛情であること、及び家族/母親への抑圧を通してしか自己を救えないことを自認していた。これらの描写は「母親殺し」の明らかな証拠と見做せる。一方物語の終盤では、醒秋は家に戻り婚約者と結婚し、母親の看病をしていたが、母親はしばらくして世を去ってしまった。これはまるで醒秋が母親の死を予想して母親の元に戻り彼女の死の到来を密かに待っているようにも読める。つまり、醒秋は母親の死を自己解放の最終的な解決法として見なしていると考えられるだろう。結果として、彼女は母親の病死を以って、漸く自由を手に入れたのである。

一方、小説全体を通して、醒秋の行動や心身の状態には、母娘の同一化が色濃く映し出されているため、母親の死は醒秋自身/娘の死を示唆していると解釈してよいだろう。作中における「母親殺し」的色彩、及び母親の死は、醒秋の中に潜んでいる消極的な気持ち、例えば自殺願望を暗に示している。ただ醒秋にとって、こうした消極的な気持ちはいずれも押し殺すべきものであるため、無自覚に抑えていた。醒秋はやましさや愛情によって、母親に対する悪意やマイナスの気持ちを押し殺してきたと告白しているが、こうした気持ちへの抑圧が、かえってテクストにおける母親への愛を際立たせているのではないか。また、書き手にも抑圧されたものだからこそ、テクストの根底に潜んでいる「母親殺し」の筋書きは、書き手の気づかないうちにテクストを「自己逸脱」し、浮かび上がってくるのである。

このような自分の中に潜んでいる「母親殺し」の気持ちは、醒秋にとってどうしても認めたくなく、向き合いたくないものであったことは既に李玲の考察で指摘されている。また、李は結末について、醒秋が最後の懺悔と自責の念を通して母と過去に別れを告げ、「母の死去により、伝統の束縛が解かれ、今後どのような反逆的行為をしても、母を傷付けることはない」[28]と述べている。但し、李の解釈は精神分析の面からもう一歩踏み込んで展開する余地がある。結論から述べると、この結末は醒秋が考えた、母娘の葛藤の解決策としての「母親殺し」と母娘の同一化との結合だと言った方が適切なのである。何故これが解決策となるかと問えば、このような結合を通し、母娘の対立が解消され、娘の自立と母娘の絆の両立が実現可能になるからである。例えば、最後の醒秋の手紙には、母にカトリックに入信することを勧める内容が見られる。

> 母は仏教の信者であり、一生観音菩薩を崇拝してきました。私がフランスから帰ってきた後、七カ月間彼女の看病をしており、毎日彼女にカトリックの教理を説いていました。最初に母は受洗する気がなかったのですが、私が諦めず、（中略）ようやく彼女を説得できました。そして、私は自分で彼女に簡単な洗礼式を行い、また彼女に自分と同じ洗礼名をつけました――それは「マリア」でした。（第十九章、397 頁）

このように、往生際の母を自分と同じ宗教の信者にし、更に母に自分と同じ洗礼名をつけたことは、まさに「母親殺し」と母娘間の同一化との結合の究極的な表現だろう。また、これ以前の醒秋は母に精神的に左右されていたが、ここでは病床にいる母に宗教と信仰を説いていることから、その精神上の地位が逆転していることを表していると考えられる。何故ならば、母が元来の信仰――仏教を捨て、カトリックに入信することを促したのは醒秋だからである。

以上の考察から、『棘心』における母親の死は、母権と父権の束縛からの娘の解放を象徴していると考えられる。また、最終的にそこから女性の家族物語の新たなパターンも提示された。そのパターンとは、母娘を断絶させる因習的な筋書きの中で、母娘間の葛藤を解消して両者の

結びつきを保つため、娘の抱く「母親殺し」を反映した母親の死という結末が設定され、娘は死にゆく母と象徴的な同一化を果たし、母への愛着と自我とを両立させるという物語である。既に述べてきたように、母娘には同一性が見られるために、母の死は娘の死と繋がっている。ここでいう娘の死とは、過去の自己の死である。つまり、醒秋の自由の獲得は過去の自己との分裂、或いは決別によってしか実現できない。母親の宿命に束縛されている自己を自分から切り離すことによって、母親との旧い絆を捨て、過去の自己は母親と共に死んでいく。その上で娘は、母との新たな精神的な結びつき、並びに新たな同一化を遂げていく。娘はこの新たな一体化により母親に対して能動的な主体となり、もう母親との繋がりを切断しなくても母親から妨害されることはない。ここに、娘の主体性と母娘の絆の両立が実現するのである。また、この家族物語の新たなパターンにおいて、父親などの男性人物は物語のはじめには依然として重要な役割を担っていたが、彼らが物語の主たる位置を占め得ず、物語が進む段階で積極的に排除されていき、中心的な位置を母親と娘に譲っている。

5. おわりに

本稿では、『棘心』を女性の家族物語と見なし、母娘関係にあるアンビヴァレンスに焦点を当てて考察を行った。まず、母と娘の精神的自立との対立関係や、母娘間の絆と異性愛との葛藤等を分析した。次に、母親像の諸側面を整理し、作中の母と娘が実際は相互抑圧的な関係であること、また母親には聖母のイメージだけでなく、死と繋がる老女というイメージも同時に見られることを論証した。最後に、作中における母娘の同一化及び「母親殺し」を象徴する要素に目を向け、以上二つのものが因習的な異性愛物語の筋書きの中で如何に母娘間の葛藤に関与していたのかを論じた。最終的に、醒秋は「母親殺し」を通じ、母との新たな同一化を遂げることによって、個人の意志と母との絆との両立を実現したという結論を導いた。

最後に、母娘をめぐる家族物語としての『棘心』の位置付けについて述べる。水田宗子は、近代の西欧と日本の女性文学について、近代的個人へと自己形成する女たちの成長物語が中心的テーマとしてあるが、それらは二つの物語に大きく分けられると指摘している[29]。一つは「女への成長の過程で娘が経験する家族内における親との対立と葛藤の物語」、それに続くのは「家族から自立した女性が家を出たあとの他者との関係、男性との恋愛における対立と葛藤の物語」である[30]。水田は続けて、後者は常に前者に影響されつつ、なかなか前者から自由になれないと述べている[31]。水田説を本稿に適用してみると、家を出た娘が母親との関係でアンビヴァレンスに陥ってしまい、母親との絆の切断の難しさを語る『棘心』は、水田が提示した二つの物語の中間に位置する物語だと考えられるだろう。

注

（1）1919 年 5 月 4 日に北京の学生を中心に反日・反軍閥の運動、いわゆる五四運動が起き、中国各地に広がった。「中国近代文学は、文学革命[1917 年。言文一致運動に相当。筆者注]を契機としこの 5・4 運動の前後に急成長しているため、1910 年代半ばから 1920 年代半ばにかけてを、文学史では 5・4 時期と称する」。（藤井省三『20 世紀の中国文学』、放送大学教育振興会、2005 年、54 頁）
（2）初版は 1929 年 5 月に北新書局により出版され、1957 年 9 月に光啓出版社は増訂版を発行。本稿は増訂版の再版（2019 年、成大出版社）による。原文引用は拙訳。
（3）沈暉「蘇雪林――文壇的一棵長青樹」、『蘇雪林文集』第一巻、安徽文芸出版社、1996 年、3 頁。
（4）白水紀子『中国女性の 20 世紀』、明石書店、2001 年、59-65 頁参照。
（5）金宏宇・章宗鋆「『棘心』的版（文）本考釈」、『長江学術』2、2011 年、15 頁。
（6）出典は詩経の「国風・邶風・凱風」篇。原詩は子育てに苦労していた母親に対し、孝行を遂げられず、母親を失望させてしまい、負い目を感じる子供達の懺悔を表している。
（7）劉乃慈「愛的歴程――論『棘心』的行旅書写」、『台湾現当代作家研究資料彙編 51・蘇雪林』、封徳屏・陳昌明編、国立台湾文学館、2014 年、200-202 頁。
（8）中国の場合においては、新女性という言葉は男性知識人を媒介とした造語で、女性の自立した面（特に経済的面で）を強調しており、新女性であるための条件は主に封建的家庭を出て、自立を求めることを意味する。（阿部沙織「＜新女性＞の死――凌叔華「女児身世太凄涼」をめぐる一考察」、『お茶の水女子大学中国文学会報』（27）、2008 年、67-68 頁参照）
（9）李玲「蘇雪林属於閨秀派嗎？――蘇雪林《棘心》重評」、『福建論壇（文史哲版）』2、1996 年、26 頁。
（10）蘇瓊「悖離・逃離・回帰――蘇雪林 20 年代作品論」、『南京大学学報(哲学・人文科学・社会科学)』40(1)、2003 年、146−153 頁参照。
（11）郭暁霞「在母親的花園裏継承什麽――従蘇雪林看現代知識女性的人生困境」、『淮北師範大学学報（哲学社会科学版）』32（1）、2011 年、11-14 頁参照。
（12）「フロイトが意味する家族物語とは、自己の起源に関する想像的な問いかけ、家族の経験の範囲内で物語を発生させる問いかけである。成長過程にある個人は、空想を通じ自分はほんとうは孤児とか私生児とかで、自分が育てられているこの「養」父母の家族より高貴なのだと想像することによって、家庭の束縛から自分を解放する」。（マリアンヌ・ハーシュ『母と娘の物語』、寺沢みづほ訳、紀伊國屋書店、1992 年、27 頁）
（13）前掲注 12、ハーシュ、寺沢みづほ訳。本段落は「序論」(9-61 頁)の特に 27-30 頁による。
（14）「テクストの自己逸脱」とはショシャナ・フェルマンの用語で、「テクストがテクストにたいして抵抗」し、目に見えなかったところで「書き手の側の意識が行う抑制と、巧妙な作為とを超越」してしまうということである。（ショシャナ・フェルマン『女が読むとき女が書くとき――自伝的新フェミニズム批評』、下河辺美知子訳、勁草書房、1998 年、10 頁）
（15）前掲注 12、ハーシュ、寺沢みづほ訳。本段落は 29-31 頁による。
（16）前掲注 12、ハーシュ、寺沢みづほ訳、30-31 頁。
（17）儒教の男尊女卑思想の下で、女性に対しては知識が不要とされ、社会進出も制限され、妻・母の家庭内役割を担うことが規範とされた、という意味付けでこの言葉を使用した。
（18）前掲注 12、ハーシュ、寺沢みづほ訳、77-78 頁。
（19）前掲注 12、ハーシュ、寺沢みづほ訳、79 頁。
（20）前掲注 12、ハーシュ、寺沢みづほ訳、27 頁。
（21）前掲注 12、ハーシュ、寺沢みづほ訳、235 頁。
（22）前掲注 12、ハーシュ、寺沢みづほ訳、117 頁。同頁によると、これはエイドリエン・リッチの用語で、「父親とは異なって、父親の権力と母親の慈しみを結び合わせるであろう男」という意味である。
（23）前掲注 12、ハーシュ、寺沢みづほ訳。第二章「兄妹愛的筋書き」（138-180 頁）の特に 161 頁による。
（24）前掲注 12、ハーシュ、寺沢みづほ訳、207 頁。
（25）前掲注 12、ハーシュ、寺沢みづほ訳、40 頁。
（26）前掲注 12、ハーシュ、寺沢みづほ訳、40 頁参照。
（27）國吉知子「母と娘―その光と闇―」、『女性学評論』29、2015 年、44 頁。

（28） 李玲、前掲、26 頁。
（29） 水田宗子「序　母と娘をめぐるフェミニズムの現在」、『母と娘のフェミニズム』、水田宗子・北田幸恵・長谷川啓編著、田畑書店、1996 年、11 頁参照。
（30） 水田、同上、11 頁。
（31） 水田、同上、11 頁参照。